

國學院大學學術情報リポジトリ

国際研究フォーラム「日本の宗教文化を撮る」： Capturing Japanese Religious Culture

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000611

国際研究フォーラム「日本の宗教文化を撮る」 Capturing Japanese Religious Culture

2021年12月11日に、日本文化研究所が主催し、JSPS科研費 JP18H00615「日本宗教教育の国際的プラットフォーム構築のための総合的研究」（研究代表者：平藤喜久子）の共催を得て、国際研究フォーラム「日本の宗教文化を撮る」を開催したので報告する。

以下が企画の趣旨である：1980年代、ジェイムズ・クリフォードら文化人類学者たちは「文化を書く」という行為をめぐる議論をした。研究者は学術的な行為として「書く」。客観的に記述しているつもりでも、そこには書き手の意図が紛れ込む。書き手と書かれる側の関係、言語の違いも書くときには影響を受ける。では、「文化を撮る」ことはどうだろうか？写真は「真を写す」と書き、あたかも客観的で真実を写しだしているように思われる。しかし、同じ場所であってもまったく同じようには撮れないように、実は撮ることもさまざまな思いや条件の制約を受けるのではないだろうか。

今は、誰もが写真や動画を撮る時代だ。スマートフォンを通話機能ではなくカメラの機能で選ぶ人は多い。誰もがいつでも撮り、発信をする。ネット上では、誰が撮ったものかではなく、決定的瞬間や「映える」ものが人気を集める。

このような時代だからこそ、今回は「日本の宗教文化」をテーマにし、「撮る」ことの難しさ、面白さ、危うさ、楽しさを議論することにしたい。

フォーラムの概要は以下の通りである：

- ・「日本の宗教文化を撮る」
- ・日時：2021年12月11日（土）13：30～17：30

・場所：Zoomによるオンライン開催

・報告者（敬称略・発表順）、題目：

- (1) 大河内智之（和歌山県立博物館主任学芸員）「仏像の3D計測と「お身代わり仏像」—仏像盗難と地域社会の現在—」
- (2) ティム・グラフ（南山大学助教）「いまドキュメンタリーを撮るといって—寺院のCOVID-19対応から考える—」
- (3) 山咲藍（映像制作会社スタジオブルー脚本家、プロデューサー）「カジュアルに真面目に、映像（映画・ドラマ・番組）で伝える神社」

・コメンテーター（敬称略）：田中雅一（国際ファッション専門職大学副学長、京都大学名誉教授）、港千尋（多摩美術大学教授、写真家）

・司会：平藤喜久子（日本文化研究所所長）

続いて各報告の要旨を掲げる：

報告(1) 大河内智之「仏像の3D計測と「お身代わり仏像」—仏像盗難と地域社会の現在—」

全国で仏像や神像など寺社に所蔵される文化財の盗難被害が発生している。被害の中心となっているのは、その文化財的価値を知られることなく、各地の集落に暮らす人々が心の拠り所として守り伝えてきた、身近に祀られる数多くの仏像である。こうした被害の増加には盗む側と盗まれる側の双方の要因が重なり合っている。盗む側の目的は換金である。オークションサイト等による入手の平易化は古美術品のマーケットを広げ、需要の増大のなか窃盗犯が跋扈し、卑劣な古美術商なども関与して市場に盗品を供給している。そして

もう一つの深刻な要因が、過疎集落の増加である。地域住民の高齢化と人口減少によるコミュニティの縮小により、集落の寺社・堂祠を管理する担い手が不足し、犯罪の抑止力が低下している。こうした状況は、今後さらに深刻化していくことが確実である。

この十数年の間に仏像盗難被害が続発している和歌山県では、注意喚起などさまざまな対策を講じる中で、県立博物館と県立和歌山工業高等学校が中心となって、3Dプリンター製の仏像を「お身代わり仏像」と称し、防犯対策を講じることが難しい集落の堂宇に安置し、実物を博物館等で保管する取り組みを行っている。製作にあたっては、3Dスキャナーによるデータスキャン、CADを用いたデータ修正、3Dプリンターによる出力を高校で行い、着色作業は和歌山大学教育学部の学生が行っている。こうして完成した精巧な複製は、高校生と大学生が現地の集落を訪れ、住民とコミュニケーションを図って引き渡している。

そのように安置することで、「お身代わり仏像」が単なるレプリカではなく、生徒・学生やさまざまな人が関わり、集落のために造像された新たな仏像であるという固有の物語を背負っていることが地域住民に実感され、信仰の場の変容を最小限に留めることにつながっている。

信仰の根源となる仏像を撮影（3D計測）し造形（3Dプリンターによる出力）し、そこに固有の歴史性を投影することで、信仰の場を維持する取り組みである。

報告（2）ティム・グラフ「いまドキュメンタリーを撮るとのことー寺院のCOVID-19対応から考えるー」

ドキュメンタリーを撮るということは、ストーリーを語ることを意味します。映像人類学の研究に取り組んでいる私にとっては、宗教研究のストーリーをドキュメンタリーとしてわかりやすく伝えるのが目的です。「仏教

寺院がCOVID-19にどのような対応を取ったか」という疑問をもって、最初は家を出ずにパンデミックと仏教についてインターネットで記事を探していました。また、2020年より前の研究でインタビューした僧侶に連絡をして、メールやZOOMを通じてインタビューしてみました。しかし、オンラインの方法では、寺院の実情を把握することに限界もありました。そのため、今年の春から遠くにある寺院ではなく、名古屋を中心に、寺院の現状を見に行きました。結果として、実際に現場に入る重要性、ドキュメンタリーの可能性も改めて理解できました。

新型コロナウイルスの感染拡大とともに、どのようにして宗教者は3つの密を避けるのかについて、メディアも学者もWeb法要やリモート瞑想などの可能性に焦点を当てました。宗教者のオンライン活動も確実に増加してきました。しかし、オンラインと対面の役割をきちんと検討するものは、現在においても少なく感じます。本発表の事例として、名古屋の大須にある万松寺を紹介します。万松寺のコロナ対策について、「御朱印や写経、ネットでゲット」という題名で、朝日新聞デジタル（2020年4月29日）の記事が次のように紹介しています。

「自粛ストレスの軽減にと始めたのが、家でお経を書き写したり、仏画に色をつけたりする「写経・写仏（しゃぶつ）チャレンジ」。寺のウェブサイトから素材をダウンロードできる。[...]できあがったら名前と住所を書いて寺へ郵送するか、境内の納経箱へ納めれば、後日、お焚（た）き上げ祈禱（きとう）をし、カード型お守り（縦5センチ、横3センチ）がもらえる。自粛要請が終わる頃合いを見て、終了する。」

これらの実践について調べるために、今年の春に万松寺に問い合わせました。驚くべきことに、オンラインや家でできる活動より、寺で行う実践の方が大事であると住職も参拝

者も指摘しました。しかし、彼らの声はニュースに取り上げられていません。私は、オンラインと対面の活動の割合に関して、再検討が必要であると考え、短編ドキュメンタリーの制作を行いました。その一部をご紹介します。以下のリンクで事前にご覧いただけます。

<https://vimeo.com/598900412>

今回の発表では、映像の単なる分析だけではなく、その成立過程も明らかにしたいのです。教育の手段としての「映像」の可能性を考えてきた私は、パンデミック状況下のフィールド・ワークにおける倫理的な問題をはじめ、ドキュメンタリーの計画、撮影の実施、編集とポストプロダクションの流れについて考察したいと思います。また、これまで発表したドキュメンタリーの配信と海外における視聴者の反応について考察したいと思います。私はこれまで数本のビジュアル・エスノグラフィーを制作しており、そのうち東日本大震災をテーマにしたものは、ワルシャワやチューリヒなどの国際映画祭で上映されました。最近には、オンライン・ストーリーミングの機会が増え、直接にネットで公開するのも主流となりました。寺院のCOVID-19対応から考えた映像を例に、映像の配信方法と注視点も明確にしたいと思います。

報告（3）山咲藍「カジュアルに真面目に、映像（映画・ドラマ・番組）で伝える神社」

2017年に制作した『茅ヶ崎物語～MY LITTLE HOMETOWN～』という、「桑田佳祐というミュージシャンが誕生した茅ヶ崎にどんな秘密があるのか？」を探るという奇想天外な映画。私が神社好きになったきっかけの作品です。桑田佳祐が茅ヶ崎に生まれた必然性を見つけるなんて無茶苦茶ですが、行き詰まった末にふと目に止まったのが寒川神社でした。寒川神社はかつて、相模国と呼ばれた領域の一之宮。今の茅ヶ崎が近いので、何か特別な土地なのでは……さらに、桑田さ

んが住んでいた近所に弁天様が祀られた神社が……など、私が見つけたパズルのピースを中沢新一先生が独自の理論で完成させ、映画ができました。

これを機に、一之宮すら知らない私が、知れば知るほど面白い神社に魅了され、NHK Eテレの「趣味どきっ！」という番組に神社をテーマにした企画を提案し、平藤先生の協力の元、番組を制作することになったのです。

実は番組だけでなく、映画やドラマには神社が関係しています。撮影に入る前、無事に撮了することを願い、神社でお祓いをしていただきます。今回は、「趣味どきっ！」という番組だけでなく、私たち、映画やドラマを制作している者たちと神社について、また、他の撮影場所とは違う神社を撮影する際の配慮や難しさについてなどもお話できればと思っています。

私が出会った神社の神職の方々はお話好きばかり。自身のお宮について、神社のこれからについてなど語り始めると止まりません。そんな長話が大好きで、聞けば聞くほど神社が好きになります。どんな時代になろうとも神社という場所が存在する意味は変わらない。神社は変わらず人々に寄り添い、そこにある。そんな神社の思いを多くの人に伝え続けることが私に課せられた使命だと勝手に思い、カジュアルに、でも真面目に映像を制作し、これからも神社界の力になりたいと思っています。

以上の三報告を受けて、田中雅一氏と港千尋氏からコメントを得た。「撮る」ということは常に一回的でありながら、それを固定化するという両義性を持った営みであること、しかしなお「撮られた」ものはその偶発性において認識を攪乱する力を持っていることが指摘され、その後質疑応答を受けて興味深い議論がなされた。最大80名程度がオンラインで参加し、有益な催事となった。（星野靖二）